

存するも、決して人生を害するものにあらず、されば人生は禍にあらず、樂なりと論結することを常とす。

樂天說の批評

心身健全なる人は、概して樂天說を自信するを以て、常とす、然れども、人生は決して圓滿なるものにあらず、人生は優劣敗の法則に由て支配せらるゝものにして、人類全體に取っては、假令利益なるも、一個人としては、不快なること少からず、又吾人は如何に努力するも、其の理想を全然實現し得るものにあざれば、樂天論者が論ずる如く、人生は幸なるものと認むること難しとす。

又社會の現状は不完全なるが爲めに、道德の實行と其の人の利益とは必しも相伴ふものにあらず、道德は快樂を以て目的と爲さずして、人格を實現するを以て目的と爲すも

のなれば、自己の快樂を減ずることあるべく、又社會の快樂を減ずることあるべし、これ現在の社會は不完全なるのみならず、病的状態なればなり、故に社會の發達を目的として、人格の實現を努むるとは、決して快樂を増加すると同一事にあらずるなり。

第二十一課 厭世說

厭世說は、樂天說と正反對なる、人生に關する見解なり、厭世說は、此の世は苦界にして、人生は結局苦痛なりとの説なり。

近世に於て、厭世說を唱へたる主なる學者は、獨乙の哲學者シヨールペンハウエルとハルトマンとの二氏なり、左に是等二氏の說を略述すべし。

(一) ショーペンハウエルの説によれば、此の世は最悪の世なり、何となれば、人生は欲望なり、吾人は欲望を離るゝ能はず、而して欲望は何故に存するかといふに、欲望は吾人の本性に缺乏する所あるが爲めに生起するものなり、而して缺乏は苦痛なり、故に人生は苦痛なり、幸福は人生に毫も存するなし、人生を以て幸福なるが如く考ふるは、乞食が我は帝王なりと夢みたるに等しき空想なり、困難は常に幸福に超過す、人類の歴史は長き苦みの夢にして、毫も進歩する所なく、又其の望みもなく、罪惡を以て充滿し、年に月に之を反復するものに外ならず、故に人生は生存する價値なきものなり。

又人生には快樂なきにあらざれども、快樂は消極にして、苦痛は積極なれば、人生は常に苦痛なりと論せり。

(二) ハルトマン氏は、ショーペンハウエルの如き極端論者にあらず、氏は此の世は最悪なりと斷言し難し、何となれば、吾人は最悪とは如何なるものなるか、之を知らざればなりといへり、然れども、此の世は存在せざりしならば、可ならんとまでは明言せり、又、氏は快樂には積極的のものありて、單に消極的にあらざることをも明言せり、要するに、氏は個人の實驗と、人類の歴史とに由て、此の世には惡の善に超過することを確認し得べしと斷言せり、詳説すれば、古代の人民は兒童の如くに、現在に於て幸福を求め得んことを努めたりしも、終に此の世は幸福を求むべき所にあらざる事を發見し、其の希望の虚空なりしことを悟りたり、次に中世の人は、現世に於て幸福を得ること難きを悟り、來世に於て之を得んことを努めたりこれ、即ち宗教を確信したる時代の

有様なりしが、終に學術の進歩に由て、此の希望も亦確信し難きを發見するに至りたり、然れども、人は何れの時か幸福なる時期の來るべしとの希望なくして、生存すること能はざるを以て、近世に至り、學術の進歩社會の改善に由て、將來此の地上に幸福なる時代の來らんことを希望し、其の有様を一日も早く來さんが爲めに努力するに至れり、然れども、これ亦虚空なり、何となれば、將來には財産は増加するならん、又學術は進歩し、諸種の新發見も出づるならん、又教育も普及せらるゝならん、又社會の改良も成功せらるゝならん、然れども、是等は決して人生の幸福を増進するものにあらず、反て是等の進歩發達に由て、人は益、人生の虚空なることを自覺するに至るべし、人類の進歩は幸福の増進にあらず、人生の虚無たることを自覺する其の自覺の増進に過ぎず、

要するに、人は世の變遷と共に、次第に人生の空虚なることを自覺するに至るのみと。

第二十二課 厭世說の批評

シヨール・ペンハウエルの説は、不正確なる心理説の上に建設せられたる説なり、氏の唱ふる快樂は、盡く消極なり、苦痛は盡く積極なりとは、心理學上の眞理にあらず、而して、此の誤謬は、氏の哲學上の意見より生起する誤謬なり、即ち氏が萬有の本體は意志なり、欲求なりとの説是なり。

次に又、假りに氏の説を眞理と認むるも、缺乏は必ずしも、苦痛にあらず、缺乏は之が満足を得る能はざる時に、始めて苦痛を生ずるものなり、缺乏其のものが苦痛にあらざるなり。

ハルトマンの説も、亦是認すること難し、氏は、古代の人は現世に於て幸福を求めたりと考ふれども、古代の人にも、思慮ある人は、現世に於てのみ幸福を求めたるにあらず、又中世の人も、盡く來世の幸福のみを希望したるにあらず、氏の歴史的區分は專斷的なりといはざるべからず、次に氏がいふ歲月は經過し、人世は變遷するも決して進歩にあらず、罪惡の反復に過ぎず、道德は毫も進歩する所なしとは事實にあらず、公平なる歴史家は、人類が其の衣食住の途に於て進化し、又社會の状態も發達したることを認む。又人心の發展と共に善惡の差別益、明白となり、又、善人の増加と共に惡人の發生するは、自然の勢なりと雖も、決して之を以て、人間社會は進歩せずと斷言すること能はず。又政治上、學術上、工藝上、人類が進歩して人類の快樂を増加したることは、否

定し難き事實なり。要するに、歴史を以て單に惡事の反復なりとの結論は、公平なる史家の是認し能はざる所なり、之に由て考ふれば、氏の説は其の根柢薄弱にして、其の所説信するに足らずといふことを憚らざるなり。

第二十三課 改善説

改善説とは、樂天説と厭世説との中庸にして、世に罪惡苦痛の存在を否定せざると同時に、人生を以て絶望のものと認めず、兩者を調和して、吾人は此の世に存する罪惡苦痛を減少する能力を有するのみならず、積極的に幸福を増進する能力を有するものなりと唱ふる説をいふなり。

樂天・厭世の兩説は、何れも吾人の道德的勇氣を阻害するものなるが、改善説は之に反して、吾人の向上的精神を鼓舞

する説なり、又樂天・厭世の兩説は、吾人人生の一部分のみを偏重して立案せられたる説なり、即ち樂天説は吾人の理想的方面を偏重し、厭世説は吾人の實驗を偏重して立てられたる説なり、完全なる説は、理想と實驗とに其の根柢を有する者ならざるべからず、故に眞理は兩説の調和にありとす。

厭世論者は、人類の歴史は、單に罪惡の反復にして、其の中に毫も進化する所なければ、幸福の増進せざるは勿論、益、苦痛を増加する傾ありと唱ふれども、公平なる歴史の考究は、明かに人類は進歩するものにして、其の幸福は次第に増進するものなることを證明す、之を詳しく言へば左の如し。

(一) 吾人の知力は發展し、天然に關する知識が増進したることは、否定し難き事實なり、従て天然の力を利用して、人類の幸福を増進する途の増加したることも事實なり。

(二) 次に吾人が感性に於て進化したることも、明確なる事實なり、諸種の方面に於て、吾人の情緒、情操が進化したることとは疑ふべからざる所なり、従て之に諸種の快樂が伴ひ生じたることも明かなる事實なり。

(三) 次に、吾人の意志が大なる發達を爲したることも事實なり、又之に由て、自己の行爲を正當に支配し、幸福を増加するに至りたることも、明確なる事實なり。

第二十四課 前のつゞき

次に又吾人が生存する社會の有様も進歩し、吾人の生命は勿論、所有名譽に至るまで、野蠻時代と異なりて、安全なる状態に進化したることは、疑ふべからざる事實なり、之を否定して、此の世は進歩せずと斷言するは、公平なる判斷にあ

らずといふも不可なかるべし。

然れども、現今の進歩發達を以て、決して満足すべきにあらず、吾人は常に、吾人の本性に存する可能性を實現して、益完全なるものと爲すことを努むると同時に、社會の弊風を改良して、益此の世をして完全なる人類の住所と爲さざるべからず、これ教育者の任務なり。

之を要するに、人生は樂天論者が唱ふる如く、幸福なるものにあらずるも、厭世論者が論ずる如く、絶望的のものにあらず、人生に苦痛の存することは事實なり、然れども、吾人類の進歩は苦痛を減少し得べし、これ人生に道德的勇氣と熱心との必要なる所以なり。教育家は理想を重んぜざるべからず、然れども、樂天家なるは不可なり、教育家は實驗を輕んずべからず、然れども、厭世家たるべからず、教育家は現世

の缺點を確知し、理想を實現して、之を矯正する所の改善家ならざるべからず。

第三章 本務論

第一課 本務の定義

本務といふ語は、古來學者によつて多少其の定義を異にすれども、具體的にいへば、吾人が人として爲すべき行爲をいふに外ならざるなり。かく本務を定義する時は、茲にいふ行爲とは、單に動作として外面に現はれたる行爲のみにあらずして、意識に現はれたる願望、欲望、目的等の如き、心意の活動をも包含することあるを忘るべからず、又、言行の如き斷行的行爲の外に、習慣品性の如き繼續的の状態をも、包含することを記憶せざるべからず、又、心理的に考ふれば、本務

は吾人をして、自己の理想と思惟する所に順應する行爲を、選擇實行せしむる道念の命令に起因する行爲なり、と之を定義し得べし。

抑、本務といふ語を始めて用ひたるは、ストア學派のゼノンといへる學者なりしと傳へらる、又此の學者は、本務論と題する書を著したりといふ、今茲に本務と譯する語は、これ迄多く法律上の用語を借り來りて、倫理學上にも義務と譯したる語なれども、倫理學上に用ふる時と、法律上にて用ふる時とは、多少其の意義を異にするを以て、其の差別を明かにせんがため、茲には本務といふ譯語を使用したり、又茲に本務と譯する語は、英語のデイッター(Duty)なり、デイッターといふ語は、負債といふ意なれば、或る學者は、本務の觀念は、負債者の存在と共に、總ての本務の債主が存在することを包含

す、詳言すれば、自己の存在と共に、總ての本務の債主たる神明の存在を豫想すと論ずれども、果して然るや否やの問題は哲學に屬し、倫理學上には、之を論定する要なし、吾人は自己の意識に訴へ、其の理想を認めて、之に順應する行爲を確知すれば、神明の存在如何に係はらず、吾人各自に本務の存することを拒む能はざるべし、本務論は、近世の倫理學者が、主として講究したる問題にして、古代ならびに中世の倫理學者中には、之を詳論したる者なし。

第二課 前のつゞき

次に或る學者は、本務は、之に對する權利を豫想するものなりと論定す、詳しく言へば、吾人に本務の存するは、權利存するを以てなりと論述し、之に反して或る學者は、權利が本

務を豫想す、詳しく言へば、吾人は各自本務を有するものなれば、之を實行する必要上、權利は生起するものなりと論述す。

吾人の所見によれば、本務と權利とは、相關的にして、互に前後を異にするものにあらず、一方より考ふれば、吾人は各自本務を有するが故に、權利を要す、他人の暴惡を防禦する權利を有せざれば、自己の人格を實現する能はず、權利は自己の本務を完うせんが爲めに、吾人に必要なる道德上の請求なりといふも不可なしと信ず、又之に反して他より考ふれば、本務は權利より生ずるものなりといふも不可なし、何となれば、吾人は各自人格を備へ、他より漫に之に暴害を加ふるを許すべからざるものなればなり。兩者は人格を有するものが、其の性能を備ふると同時に、生起する所のものにして、互に前後を争ふものにあらざるなり。

又他人に對する方面より考ふるも、同一の結論に達せざるを得ず、吾人は他人の權利を重んぜざるべからず、これ他人の人格に對する至當の行爲にして、他人に對する本務なり、又吾人は他人の人格に對して、相當の本務を盡さざるべからず、而して之が爲めに、吾人は先づ、他人の權利を重んぜざるべからず、かく本務と權利とは、併立するものにして、孤立するものにあらず、然れども、玆にいふ權利なるものは、法律上の權利と同一にあらず、人格に屬する道德上の請求に外ならざることを記憶せざるべからず、即ち、人が人として有するものにして、其の賢愚貧富に由て異なるものにあらず、故に通例天賦の人權として、法令の規定に由て生ずる所の政治上の權利とは差別せらる、人格に屬する天賦の權利

は、左の四種を以て最も重要なるものとす。

- (一) 生命保存の權利。
- (二) 自由行動の權利。
- (三) 物品所有の權利。
- (四) 名譽保護の權利。

是等の權利は、左の三特色を有す。

- (一) 人格に生來屬するものにして、天賦なること。
- (二) 人格に屬するものにして、知情意に於て缺くる所なきものは、誰も之を有すること。
- (三) 各個人に屬するものにして、正當の理由なくして、之を奪ひ取り、又は、他人に譲り能はざるものなること。

第三課 本務の本質

本務が、事實にして、空想にあらざることとは、人類の經驗に就て考ふるも、亦吾人各自の實驗に由て考ふるも明かなり。古今何れの國、何れの時に於ても、人が人として爲すべき行爲と爲すべからざる行爲との存することを、信せざりし人民の存在せし事なし、固より開明の程度に由て、如何なる行爲を以て、本務と認むるかは、常に同じからずと雖も、本務の觀念を有せざる人民の存せざりしことは、人類の歴史が明證する所なり。

又本務の觀念は、人類に普遍的なるのみならず、本務は、人生の最も貴重なるものと、思惟せらるゝ所のものなり、未だ本務といへる語を有せざる人民にても、之を認めざるはなし、他の語を以て、其の觀念を言ひ表はさざる人民なし、これ古今何れの國語に就て考ふるも、疑ふべからざる所なり、而

して此の觀念は何れの國、何れの時にても、人心に一種特別なる感應を惹き起す所の觀念にして、之が爲めには、一命を捨つるも悲しまざるが如き、感應を惹き起したる實例少からず、之に由て考ふるも、本務の實在は、人類が一般に確信する所なること明かなり。

又吾人の實驗に就て考ふるも、吾人は自己の行爲に於て、全く無責任なりと思惟したる時日なし、即ち自己に對し、他人に對して、常に人として爲すべき行爲あり、爲すべからざる行爲あることを、感知せざる時あるなし、これ本務が事實にして、空想にあらざる明證なり。

以上本務の實在に就て論明せり、これより其の本質如何に就て論明すべし、本質を論明するに先ちて、其の實在に就て論明したるは、事物の本質に就て論證するも、其の實在を

確知せざれば、空論に過ぎざるを以てなり。

第四課 前のつゞき

本務の本質は、左の二特色を以て之を言ひ表はし得べし。即ち(一)本務は絶對的なること(二)本務は普遍的なること、是なり、左に此の二特色に就て論明すべし。

(一)本務が絶對的なりとは、本務は自己の意に由て變更するものにあらず、本務は人として爲さざるべからざる行爲なり、本務は甲なるが故に寛にして、乙なるが故に嚴なるが如きものにあらず、又今日嚴にして明日寛なるが如きものにあらず、本務たる以上は、必ず自己の好惡如何に係はらず、之を實行せざるべからざる行爲なり、人の快苦に由て變ずるものにあらず、又人の利害得失に由て變ずるものにあらず。

す、本務は本務として、必ず之を實行せざるべからざる本質を有するものなり、之を本務の絶対性といふなり。

(二)次に本務が普遍的なりとは、如何なる意か、本務が普遍的なりとは、知情意を備へ、人格を有する生物は、其の教育程度の如何に係はらず、又老若男女に關係なく、之を實行せざるべからざる本質を有するものなり、之を本務の普遍性といふなり。

本務は本務として、以上の二特色を有するものなり、然れども、之を以て、人には、誰も皆同一の本務ありと推知するは、大なる誤解なり、本務は、本務たる以上、誰も本務として其の利害損得に係はらず、實行せざるべからざるものなれども、人は其の教育の程度、其の位置、其の職業、其の年齢、其の貧富強弱、其の他の事情の差異に由て、各自其の本務を異にする

ものなり、教育ある人には本務なるも、無學の人には本務ならざるものあり、又富者には本務なるも、貧者には然らざるものあり、人は、各自其の本務を異にするといふも可なり、決して各人其の本務を同一にするものにあらずと雖も、本務たる以上は、必ず本務として之を實行せざるべからず、又人として全く本務なきものなし、故に本務は絶対的にして、又普遍的なりといふなり。

本務は、以上に説明する如きものなるを以て、吾人は屢、「其の結果如何に係はらず、本務を實行せよ」との訓誡を、耳にすることあれども、決して之を誤解すべからず、「其の結果の如何に係はらず、本務を實行せよ」との訓誡は、思慮なく自己の所信を、必ず實行せよとの意にあらず、單に本務と知了したる以上は、自己の利害得失如何を思はずして、之が實行を躊躇

踏する如き事あるべからずとの意に外ならざるなり、之を解して「自己の所信を固守して猛進せよ」との意と爲すは、大なる誤謬なり。

又本務の普遍性及び其の絶對性を誤解して、吾人の本務を以て、萬世不易にして、人類は進歩するも變更せざる者の如く考ふるは、正當にあらず、何となれば、假令人として爲すべき本務は、客觀的には一定すと爲すも、之を認識する吾人人類の知力は、發達進化するものなれば、人類の發達に従ひて、本務と認むる行爲の増加するは、疑ふべからざる所なり、又假令其の數に於て増減なしとするも、其の觀念が益、明確なる域に進化するは、自明の理なれば、本務の觀念を進化なきものゝ如く考ふるは大なる誤なり。

第五課 本務の本源

既に論述したる如く、本務は絶對的なりと雖も、こは決して、本務は目的なき行爲にして、其の實行すべき理由なきものなりとの意にはあらず、各本務には其の本源あり、其の理由存して偶發的の行爲にあらず、然らば、本務の本源、本務の理由は、何なるか、本務の本源は、一言せば至善なり、人生究竟の目的なり、此の目的確定する時は、之を實現するが爲めに、爲さざるべからざる行爲と、爲すべからざる行爲とを生ず、是等の行爲は、即ち吾人の本務なり、故に個人的快樂説を信する人には、萬事に於て自己の快樂を増進することを勉むるは本務なり、公衆的快樂説を信する人には、總ての行爲に於て、最多數の最大快樂を増進することを勉むるは、即ち其の本務なり、其の他何れの至善論を信する人にて、

其の所信に順應する所の行爲を實行して、其の信する所の至善に達することを勉むるは、即ち其の本務なり、故に約言せば、本務は至善に達する手段なり、方法なり、段階なり、故に本務の本源は至善なり、至善は目的にして、本務は手段なり、本務は後果にして、至善は其の理由なりといふも不可なしとす。

かく總ての本務は、至善に到達する手段なれば、吾人は如何に努力するも、本務以上の行爲を爲す能はざること明かなり、然るに世には、吾人々類は、自己の本務以上の善行を爲し得る如く考ふる人あり、大なる誤解なり、例へば、富者は本務以上の善行を爲し得べし、何となれば、富者は其の所有する所の財産を以て、必ず貧者を助けざるべからざる本務なり、故に、若し富者にして、其の所有を慈善事業に投じて、世の

貧苦を救はんか、これ其の人が自己の本務以上の善行を爲したるなり、再説すれば、人には各、一定の本務あり、これより以上の善事を爲す人は、自己の本務以上の善行者なりと、かくの如きは、吾人が屢、聞く所なれども、大なる誤謬なり、本務は誰にも一定のものにあらず、各人其の本務を異にすることは、既に論述したるが如し、吾人は如何に努力し、又如何に多くの善事を爲すも、決して自己の本務以上の善事を爲したるにあらず、多くの善事を爲し得る能力を有して之を實行せざる人は、其の本務を怠りたる者なり、吾人は各自本務を充分に盡さざることあるも、本務以上の事を爲し得るものにあらずるなり。

第六課 前のつゞき

前上に由て考ふれば、本務を二種に分ち、一を確定の本務と稱し、他を不確定の本務と稱し、前者は人として爲さざるべからざる所なるも、後者は人の隨意に之を實行すべきものなりと論ずるは誤なり、例へば負債は之を償却せざるべからざるも、慈善救済は必ず爲さざるべからざるものにあらず、各自隨意に爲すべきものにして、之を爲す人は善人にして、自己の本務以上の善事を爲したる人なりと考ふる如きは、大なる誤なり、本務は何にても本務たる以上は、確定したるものなり、確定せざる本務なるものあるなし。

又世には、吾人々類の本務を、完全なる本務と、不完全なる本務との二種に差別し、前者は吾人の必ず實行せざるべからざる所にして、後者は隨意に任して可なるものなりとの

説明を爲す人あれども、是亦不可なり。

又本務を消極積極の二種に分ち、以上に述べたると同様の差別を爲す人あれども、これ亦不可なり、何となれば、吾人は爲すべからざることを爲さず、爲すべきことを爲して、始めて吾人の本務を盡したる者といふべきなり、其の一部のみを盡すも、決して本務を完了したるにあらざればなり。

以上論述する如くなるを以て、倫理上、人には功勞なるものなし、吾人が實行し得る限り善事を爲し、悪事を避け、始めて應分の本務を盡したるに過ぎざればなり、故に吾人は、本務の實行を怠り、悪事を爲したる時は、自己の良心に對して恥づべきなり、之に反して如何に善事を爲し、本務を全うするも、誇る所あるべからず、何となれば、これたゞ吾人が爲すべき事を爲したるに過ぎざればなり、吾人が本務を盡すは

至當の事にして、惡事を爲すは背理なり、此の點に於ては、法律と道德とは、大に其の趣を異にすといふも不可なし。

第七課 本務の分類

本務の分類法は、實踐倫理に屬する事項にして、理論上必ず一定の分類法を採用せざるべからざる理由なし、便宜上如何に之を分類するも不可なしとす、然れども古來本務の分類は、學者が之に關する所説を異にして、爭論せし問題なれば、聊か左に之を論明すべし。

カントの説によれば、本務は吾人相互の間に存するものにして、人類以上又は以下のものに對して存するものにあらず、詳言すれば、神明の如き人類以上のものに對する本務あるなし、神明の如き人類以上のものは、吾人々類に對して

權利を有するも、本務を有せざれば、吾人も亦之に對して本務あるなし、又禽獸草木の如きものは、吾人に對して權利なく、又本務なし、故に吾人も亦彼等に對して本務あるなし、本務は人間の關係なり、互に權利本務を有するものゝ間のみ存するものなりとの説を唱へたり。

本務が人間相互の關係なることは、敢て論證を要せずして明かなり、然れども禽獸の如き感念を備へ苦痛を感じるものに對して、吾人は全く本務なしと論定するは不可なり、然れども、人に對すると同一の本務の存せざるは勿論なり、又神明の如き人類以上のものに對しても、其の實在を信ぜざる人が、之に對する本務を認めざるは勿論なれども、其の實在を信じ、幾分けても吾人の人格と多少共通の性を有するものと信ずる人にして、之に對する本務が全く存せずと

思惟するは不合理なりといはざるを得ず。固より吾人相互の如き本務にあらざるは言を待たずして明かなり、要するに本務を以て人格を備ふる者の間に存する關係なりとすれば幾分にも人格の要素を備ふるものに對しては、全然本務あるなしと思惟するは至當にあらず。

若し個人以上のものに對しては、本務なしとすれば、社會の如き團體は個人以上のものなれば、之に對する本務あるなしと言はざるべからず、これ輓近の倫理學者が否認する所にして、カントの所說の不完全なることを證するものなり。

第八課 前のつゞき

次に古來自己に對する本務は、人格の觀念發達せざりし

時代には、學者の認めざる所なりしが、輓近の倫理學者は自他共に人格を備ふるものは、之に對する本務を認むるに至りたり。

然れども古人は、自己に對する本務、又は動物に對する本務を全く知らざりしにはあらず、自己に對する本務は、之を他人(主君又は兩親)に對する本務として、其の必要を教へたり、又動物に對する本務は、之を自己に對し、又は他人に對する本務として之を教へたり、故に或る學者は、諸種の本務中にて、最も主要なりと認むるものを原始的とし、他を派生的として説明せんことを試みたり、詳言すれば、或る學者は、一切の本務を他人に對する本務として、之を説明せんと試みたり、例へば、自己に對する本務を、親に對する本務として説明し、又之に反して、人に對する本務を、自己に對する本務と

して説明せんと試みたり、例へば、他人に對して本務を盡さざる人は自己に對する本務を怠りたる人なりと説明し、動物に對するも亦同じ説明を爲したり、又宗教家は一切の本務を神明に對する本務より派生したるものゝ如く論ずれども、何れも正當なる本務の説明にあらず、元來本務は、其の理由を至善に有するものなれども、之が對象は手段にあらす、例へば他人に對する本務を、自己を完全に爲す爲めの行為とすれば、他人を自己完全の手段と見做すに等し、人類は決して手段として使用するべきものにあらす、要するに、吾人が本務を實行する理由は何れに存するも、本務は其の對象たる實在に對する本務として之を實行せざるべからず、本務の絶對性とは、即ち之をいふに過ぎざるなり、故に諸種の本務は其の理由より之を統一し得るも、本務としては、之を

統一すること難し、然れども、如何なる本務も間接には互に關係を有するものなれば、一の本務を實行する時は、他の本務に幾分の影響を與ふることは論を待たずして明かなり、例へば、自己に對する本務を盡さずして、他人に對する本務を完うする能はず、他人に對する本務を怠る時は、社會に對する本務を全うする能はざるが如し、故に蘇國の倫理學者セス教授は、自己の家族、友人及び隣人に最もよく仕ふるものは、最もよく社會に事ふる人なり、最もよく自己の生存する社會に仕ふる人は、最もよく其の國家に仕ふる人なり、最もよく其の國家に仕ふる人は、最もよく人道に盡す人なりといへり、これ最もよく諸種の本務の關係を言ひ顯はせる言なりといふべし。

第九課 本務の輕重

前上論述したる如く、本務は絶對性を有するものにして、本務なりと確定したる上は、自己の好惡如何に關せず、之を實行せざるべからざる本質を有するものなり、然れども、本務には自ら輕重の別あり、詳しく言へば、吾人に重大なる關係を有するものと、然らざるものとの差別が、吾人の本務と認定する行爲中に存することは、本務の本源に就て考ふれば、明かなり、同じく吾人の本務として實行せざるべからざる行爲の中にも、人生の目的、即ち、理想の實現に重大なる關係を有するものと左程に主要ならざるものと存すること、一言すれば、本務に輕重の別あることは、明かなり、故に重大なる本務を先にして、輕小なる本務を後にすべしとの規定は、通常一般の規定なれども、時としては此の規定に反す

るが如く見ゆる順序を採らざるべからざる場合あり、これ吾人が實踐躬行上、大に困難を感じる所なり、然れども、此の規定を解して、假令通常の場合に於ては輕小の本務なりと見做さるゝも、或る格段なる場合に於ては通常輕小なりと思惟せらるゝ本務が重大の本務なり、本務には、客觀的に輕重の差別なし、其の事情に由て、其の輕重は變更するものなりといへば、前記の規定に由て吾人は如何なる本務を先にし、如何なる本務を後にすべきかを決定し得べし。

かく考ふる時は、吾人の職業、位置、年齢、其の他の事情に由て本務の輕重は定まるものなれば、絶對的に何の本務は重大なり、何の本務は輕小なりと、豫め之を確定すること難し、故に本務の輕重は物品の輕重大小を認定するが如く、之を認定し得るものにあらず、人の人たる本務を完うせんと欲

するものは、常に人生の目的を知了し、又自己の位置と参照して、之を日常の行爲上に應用し、以て自己の爲すべき本務を決定せざるべからず。

第十課 前のつゞき

以上の如く本務は主觀的に變更するものなれば、吾人が通常最も輕小なりと思惟する本務にして、最も重大の本務たる場合なきにあらざれば、本務を盡し、人たる本分を全うせんと欲するものは、日夜人生の目的を顧み、自己の境遇に照し、之を實現せんとする意志の傾向、即ち注意の周到と、道徳上の勇氣とを有せざるべからず、他の語を以ていへば、善良なる品性を有せざるべからず、此の品性を有すれば、吾人は容易に自己の爲すべき行爲と、爲すべからざる行爲とを

判別し得べし、又自己の實行せざるべからざる本務の輕重を判定し得べし。

かく本務の輕重は、各人が自己の境遇を人生の目的に参照して決するものなれば、各人自ら之を決定せざるべからざる問題なり、本務の輕重を容易に決定し能はざる時には、他の意見を聽く必要あり、又吾人は誰も全智者にあらざれば、他人の意見を聽かざるべからざるものなりと雖も、本務の輕重に關する最後の決斷は、各人自ら之を爲すべきなり、特に困難なるは、同時に殆ど其の輕重を明確に判定し難き二行爲の一を實行せざるべからざる時なり。かくの如き場合に遭遇する時は、十分に其の結果に就て公平無私に思慮し、之に加ふるに、自分より經驗に富みたる親交の人に諮り、以て之を決定するの外、途なしとす、此の難問は、古來學者が

本務の衝突と稱する所のものなり、然れども嚴密にいへば、本務の衝突にあらず、何れが本務なるかを認定することの困難に外ならざるなり、何となれば、二個の本務が一の場合に存する理由なければなり。

かくの如き難解の場合に遭遇したる時に、最も依頼すべきは自己の品性なれば、人たる本務を全うせんと欲するものは、其の準備として、平素善良なる品性を養成せざるべからず、これ徳論と本務論との關係の存する所なり。

第四章 徳論

第一課 徳といふ譯語の意義(徳の定義)

茲に徳と譯する語は、英語の (Virtue) なり、此の英語は羅旬語の (Virtus) より出で來りたる語にして、羅旬の此の語はま

た同國語の (Viri) 即ち男といふ語より出でたる者なり、而して (Virtus) といふ羅旬語の意は、始め勇敢の義にして、特に軍事上の勇敢を指示する語なりしが、後には、其の意義變化して、適當合宜調和等の如き目的に其の手段の相當したることを言ひ顯はす希臘語の徳といふ語と等しき意義を有するに至りたり。

希臘人は、何事に拘はらず、優秀卓越の美質を備へたるものを有徳のものと思惟せり、故に道德上に於ては、品性又は人格に於て非凡の者を有徳者と考へたり、これが爲めアリストテレースは徳を知性的と感性的徳との二種に分ちたりしが、其の後、徳といふ語は次第に意志の性質を言ひ顯はす語となりて、道德上の意義のみを有するにいたりたり。

古來徳といふ語の定義は、時代と學者とに由て同一にあ

らず、今其の二三の主なる例を擧ぐれば左の如し。

アリストテレースの説によれば、徳は道德的行爲を反復することによつて生じたる結果、即ち活動によつて受け得たる性質にして、心意が習得したる道德的堪能に外ならざるなり。

カントの説によれば、徳とは本務を追求する意志の道德的強力、又は自制の道德的堪能、又は道德律によつて自己の行爲を規定する意向といふも不可なし。

現今の倫理學者パウルゼンは、其の著倫理學系統中に、徳は個人及び團體の幸福を増進する意志の習慣又は行爲の方法なりと定義せり。

要するに徳とは、人生究竟の目的に上達するに必要なる心身の習慣をいふなり、故に吾人が習得したるものにして、

生來吾人の本性に存するものにあらざるなり。

徳を以て上述の如きものなりとせば、徳の内容は、社會の進歩と人心の發達とによつて、古今同一にあらずして、常に變化するものなれども、其の形式より考ふれば、決して變化せざるものなり、徳は常に同一不二なりといふも不可なし。何となれば、諸徳は何れも至善に適應する習慣にして、其の形多様なるも、至善より見れば、徳は同一にして、多種ならざるを以て、諸徳といふ熟語を使用すること能はず、これ古來徳は唯一なりと學者の唱へたる所以なり。

第二課 前のつゞき

上來述ぶる所の如しと雖も、徳は他方より考ふれば、唯一にあらずして多種なりといふも不可なきが如し。何となれば

は吾人は人格としては單位なれば、其の至善は唯一なるも、人格は諸種の活動を備ふるものにして、是等諸活動が盡く同時に至善、即ち理想に適應する習慣を養成すること能はず、其の中何れかを以て始め、漸次に其の理想に接近し、至善に到達する組織の天性を有する者なればなり。されば、人格として至善より考ふれば、未だ以て有徳者なりといふべからざるも、其の一部分即ち人性の或る方面に於ては、他の方面に於けるよりも、一層其の理想とする所に接近し、至善の一部を實現するものなり、乃ち其の實現したる方面を名づけて徳の一なりといふも不可なしと信ず、故に嚴密にいへば徳は唯一なれども、理想を實現して、至善に接近せる人性の方面を未だ發達せざる方面に比較して、廣義にて、之を假りに徳といふも不可なしとすべし。

又以上論述せる如く、徳は意的要素を包含するものなれば、自己の意志の未だ發達せざるものは、之を無徳なりといはざるべからざるも、生來人の至善に上達するに有益なる傾向を具有するものは、其の生來の傾向を指して、之を徳と稱することあり、然れども、かくの如きは、未だ以て真正の徳といふべからず、真正の徳を知らんと欲せば、天然の徳と道徳上の徳との差別を認めざるべからず。

又生來の傾向は、平凡なりとも、其の教育宜しきを得て善良なる習慣を有する人少からず、然れども、此の良習慣も嚴密に言へば、徳にあらず、世人は通常之を徳と稱すれども、徳は嚴密にいへば、自己の意志と離るゝこと能はざるものなるを以て、如何に善良なりとも、他人の力に由て養成せられたる徳は、之を自己の意志に由て養成したる徳と混同すべ

からず、兒童が具有する徳は、多くは其の兒童が生來有する天然の傾向か、然らざれば教育に由て他人が養成したる徳なれば、有徳の品性を形成する準備に過ぎず、嚴密に言へば徳は自己の意志を離れて存するものにあらざるなり。

第三課 徳の本質

古來徳の本質に關しても、學者の所說一定する所なし、左に其の主なる説を論述すべし。

古來、徳の本質を知識なりと唱へたる學者少からず、其の最も有名なるはソークラテースなり、此の説を唱ふる人の言によれば、「善を知る者は、必ず善を爲す者なり、善の何たるを知るも、善を爲さざるものは、未だ充分に善の何たるを知らざる人なり、惡を爲す人は未だ善を知らざる人なり、惡の

何たるを知りて惡を爲すものならず、惡を知りて、惡を爲す人は未だ惡の何たるを知らざる人なり、善に關する知識は必ず善行を生ず、故に徳は知識なり、不徳は無知なり」といへり。

此の説明が眞理を包含することは疑ふべからず、知的要素は徳に缺くべからず、善惡を判別する能力を有せざる者は有徳なること能はず、徳は知を預想すること明かなるを以てなり。

又世には、無學より生ずる不徳少からず、善の何たるを知らざるが爲めに惡を爲す者少からず、此の點より考ふるも、知識が徳に必要なること明かなり。

然れども、徳は智なりと斷言すること能はず、世には善を知りて善を爲さざる人少からず、又惡なるを知りて惡を爲

す人多ければ、智徳が全く同一にあらざることとは、人生の實際に就て考ふるも明かなり。

要するに知識は徳の一要素なるも、唯一の要素にあらず、然らば、徳の他の要素は何ぞや、徳は知的要素の外に、善の何たることを知りて、之を實行し、惡の何たることを知りて、之を避くる決斷を包含す、此の決斷を有せざるものは、如何に善惡の差別に就て明瞭なる知識を有するとも、有徳者とは稱し難し、抑、此の決斷力は如何なる性能より生じ來るものなるか。

蓋し道德的決斷力は、決意及び愛情の二者に由て成立するものなり、決意が徳の一要素なることは、行爲の善惡に關して、如何に明瞭なる知識を有するも、之を實用して善人たらんことを求めざる人は、之を有徳の人と稱すること能は

ざるを見て明かなり、此の決意は吾人の意志作用に外ならず、故に意志の作用が徳に必要なこと亦明かなりといふべし。

第四課 前のつゞき

意志作用が徳に必要なこと、前に述ぶる如しと雖も、如何に意向にして善なるも、善惡正邪に關する知識を有せざるものは、有徳の人たること能はず、されば、古來徳の本質を意向なりと唱へたる學者なきにあらざるも、意向は徳の唯一要素にあらず、カントの如きは、善意を以て徳の唯一要素の如く唱へたるも、かく説明する時は、徳は單に善き志を有する人にあらず、善き志を有し、又善の何たるを知りて、之を實行する人なり、無識の人は有徳者たること能はず。

次に愛も亦徳の要素なり、有徳の人は、單に善の何たるを知るのみならず、之を實行せんとの志を有し、之に加ふるに善を爲すを以て樂と爲し、之を愛する所の人ならざるべからず、他語にていへば、有徳の人は道德上の熱情を有する人ならざるべからず、此の熱情を備へずしては、有徳の人たること能はざるなり、然れども、又如何に善意を慕ひ求むる所の愛情を有すとも、善惡正邪に關する知識と、之を實行する所の志となき人は、有徳者たること能はざるなり、古來徳は愛なりと唱へたる學者なきにあらず、佛國のマレブランシの如きは、徳は愛善なりと論述せり、然れども、愛は徳の一要素にして、唯一の要素にはあらず、如何に愛善の情に熱きも、善惡の判別明確ならず又之を斷行する勇氣を缺く時は、之を有徳の人と稱すべからざるなり。

以上論述する如くなるを以て、徳には知情意の三要素存すること明かなり、故に徳は人格に屬する良習慣なりといふも不可なかるべし。

斯く徳に三要素存すること明かなる點より觀れば、古來學者間の難問たる「徳は教育せられ得るものか否か」の問題は、容易に之を解釋し得べし、即ち徳は其の知的方面より考ふれば、之を教育し得るものなること疑ふべからず、又之を意志の方面より考ふるも、其の力を養成し得ること論を待たずして明かなり、又其の情的方面より考察するも、徳は發達するものなること明かなり、故に徳は教育せられ得るものなりと斷言するも、敢て理由なきにあらざるべし。

第五課 徳と本務との關係

既に論述したる如く、徳は善良なる習慣に外ならざれば、本務の實行と徳との間には、互に親密なる關係存すること明かなり。

徳が本務の實行に及ぼす所の影響は、徳が一種の習慣に外ならざること由て、之を推知し得べし詳説すれば、習慣は常に活動の傾向を強め、之が實行を容易ならしむるものなり、此の理は、習慣の善悪何れにも同様なり、故に善き習慣を備へたる人は、自己の本務と認むる行爲を實行すること極めて容易なり、即ち有徳の人は、殆ど勞せずして本務を實行し得べし、之に反して悪しき習慣を備へたる人は、自己の本務を明知するも、之を實行すること極めて困難なり、加之、有徳の人は、平素其の心掛正當なるを以て、自己の本務を感

知すること難からず、又善惡の判別に就て惑ふ所少し。

かく徳と本務とは、親密の關係を有するものなれば、自己の本務を認知して、之を實行せんと欲するものは、常に修徳の心掛を持せざるべからず、不徳者と雖も、本務を實行し得ざるにあらざるも、其の勞、有徳者と同一にあらす。

次に本務が徳の養成に重大の關係を有することは、徳は善良なる習慣に他ならずといふを見て明かなり、徳は嚴密にいへば吾人が自己の本務を實行することに由て、養成したる善良の品性に外ならざるなり、約言すれば、徳は自己の本務を實行することが、心意に生じたる結果に外ならざるなり。

吾人々類は身體作用に於ても、心意作用に於ても、絶えず習慣を養成する組織を有するものなり、故に平素其の行爲

は勿論、其の動作に於ても慎重ならざるべからず、これ知らず識らず習慣を養成し、終に之を容易に改むること能はざるに至るものなればなり。

第六課 前のつゞき

習慣は左の二特色を有するものなり。

- (一) 同様の作用を反復する傾向を有すること、即ち一度或る事を爲せば、再び同様の事を繰り返して爲さんとする傾向を有するものなり。故に吾人は、常に此の點に注意して、悪習慣を形成せざるやうに注意せざるべからず、之に反して善習慣を形成すれば、勞せずして益、善人たることを得べし。
- (二) 習慣は同様の事を爲すことを益、容易ならしむるものなり、即ち一度或る善事を爲せば、再び之を爲す時には、前より

りも一層容易なるべく、次第々に殆ど意を用ひずして之を實行し得るに至るものなり、故に常に善習慣を養成し、悪習慣を形成せざるやう注意せざるべからず、何となれば、悪習慣を形成すれば、思はずして惡を爲し、益、進んで惡人となる恐あればなり、之に反して善習慣を形成すれば、善を爲すこと益、容易く、勞めずして善人なることを得ればなり。

習慣は、以上述べたる如きものなれば、其の強弱は左の諸點に依存す。

- (一) 習慣は、其の人の自覺の強弱に由て、其の固定の度を異にす。
- (二) 習慣を形成する爲めに、反復したる度数に由て、習慣は其の強弱を異にす。
- (三) 習慣は之を形成する爲めに、繼續したる年月の長短に

由て、其の強弱を異にす。

(四) 習慣は年若き時に最も形成し易く、又若年に形成したる習慣は強固なり。

習慣は、以上の如き特色と條件とを有するものなれば、常に吾人は自己の行爲を反省して、善き習慣を養成し、悪き習慣を形成せざるやう注意し、善良なる人たることを努めざるべからず。

要するに、平素自己の本務なりと感知する行爲を實行するは、善良なる習慣即ち徳を養成する最良の方法なり、又有徳の人となりたる上は、本務を實行すること容易なり。

第七課 徳と至善との關係

既に論述したる如く、徳は一種の習慣なり、其の習慣に存

する善惡の差別は其の至善に對する關係如何に由て、定まる所の性質なり、即ち吾人が至善に到達するを補助する習慣は善良なる習慣にして、之を徳と稱し、之に反して、吾人が至善と認むるものに上達するを妨ぐるものは、惡習慣にして、不徳と名附くるものなり、故に徳不徳は絶對的差別にあらす、吾人が至善と認むるものに由て成立する所の差別なり、然るに徳不徳を以て、絶對的差別なるが如く思惟し、以て道德上の誤謬に陥りたる者少からず。

以上論述したる如く、徳不徳は絶對的差別にあらずして、相對的差別なれば、至善の解釋を異にするものは、自ら徳不徳の差別に關しても、其の見解を異にせざるを得ず、例へば、快樂を以て至善と認むる學者が徳と認むる者は、制欲を以て至善なりと認むる學者が徳と認むるものと、相反せざる

を得ず、固より或る點に於ては、快樂論者と克己論者と、互に一致する所なきにあらざれども、其の理想とする所相反するを以て、自ら之に到達する手段たる徳に關する見解を異にするは免れ能はざる所なり。

又至善即ち人生究竟の目的に關する見解は、學者に由て異なるのみならず、時代に由て同一にあらざれば、古今徳と認めらるゝものが、時代に由て同一にあらざるは明かなり。例へば或る時代に於て徳と認められたるものが、社會の發達進歩に由て徳と認められざるに至りたる實例少からず、又假令其の徳目は變更せざるも、其の概念の内容變化して同一にあらざる場合少からざれば、同一の徳目存すればとて、徳に變化なしと考ふるは大なる誤なり。

・又吾人が徳と認むる善き習慣は社會の發達、人心の發展と共に増加するものなり、これ吾人が生存上必要なる活動の次第に増加するを以てなり。

第八課 前のつゞき

古來徳と認めらるゝものゝ變遷に就て考ふるに、人類の進化と共に徳と稱せらるゝ習慣は、次第に其の範圍を廣むるものゝ如し、例へば始め徳と認められたるものは、概して個人的徳なりしが、人類の進化に伴ふて、次第に家族的、國家的、人類的の徳發現せり、然れども後者の發現に由て、前者は消滅せしにあらざり、故に徳目は世の進歩と共に増加せざるを得ず。

又徳と稱せらるゝ習慣は、人類の進歩と共に、消極より積極に向ふものゝ如し、例へば制欲は、消極の徳なり、進取は積

極の徳なり、人心發展の程度低き時代にありては、徳と稱せられたるものは、概して自己を抑制する習慣なりしが、人心の發達と共に、次第に自己を完全ならしむる習慣をも加へらるゝに至れり、此の點より考ふるも、徳の數は次第に増加せしこと疑ふべからず。

以上論述する如く、徳は至善に對するものなり、而して至善は人に由て變ずるものにあらずれば、徳は人に由て變ずるものにあらず。如何なる人も同様の徳を備へざれば、至善を實現する能はず、人は如何なる業務に従事するも人として同一なり、人格たる點より考ふれば、互に其の目的を異にするものにあらず、人として吾人が具有すべき徳は、又男女の性別に由て變更するものにあらず、例へば正直は男子に必要なれば、女子にも亦必要なり、又貞操は女子に必要な

れば、男子にも必要なり、但し其の應用の方法を異にするこ
とあるは論を待たず。

又人は如何なる業務に従事するも、人として修養すべき徳に異動あるなし、然れども、其の徳を應用して、人たるの本分を完うする方法は同一にあらず、細密に言へば、人の地位職分、貧富等の差に由て、其の應用同一にあらずれば、此の點より考ふれば、徳は千變萬化するものなりといふも不可なし、然れども、人として吾人が修養すべき徳は人に由て變ずるものにあらず、萬人同一なり、此の點より考ふれば、徳は古今同一なりといふも不可なきなり、要するに徳は至善より考ふれば、萬人同一なり、然れども至善に到達する爲めに、吾人が執る所の業務より考ふれば、各人其の要する所の徳は、同一にあらずといふも不可なきなり。

第九課 徳の分類

徳の分類も、古來學者に由て其の方法を異にし、一致する所なし、然れども、又強て一定の分類法を採用せざるべからずといふ理なし、便宜に従ひ之を分類するも不可なしとす、古來學者が唱へたる主なる分類法は、徳を主徳・從徳の二種に分ちて其の輕重を指示せり、古代希臘の哲學者は、節制・勇氣・智慧・正義の四徳を以て主徳と稱せり、中世の學者は、信望・愛の三徳をも主徳と稱し、之を宗教的主徳と名附け、前記の四徳を天然的主徳と名附けて互に相區別せり。

近世の學者中には、徳を消極・積極の二種に分ちて、之を論述する人あり、詳言すれば、罪惡を避くる善良なる習慣と善行を實行する習慣との二者是なり、此の二者は、其の發生の

時期に就て考ふれば、消極を先にし、積極を後にすれども、其の性質に就て考ふれば、積極の徳は、消極の徳に優れるものなること明かなり。

又徳を私徳と公德との二種に分ち、之を論述する學者あり、即ち私徳とは、一個人に對する徳をいひ、公德とは、公衆に對する徳をいふなり、是等二者の順序に就て考ふるに、私徳は其の發現早く、公德の發現は、之に隨へり、要するに社會發達の程度低き時代には、公德の發達低きを以て常とす。

又諸徳を左の如く分類する學者あり。

(一) 個人的の徳

個人的の徳に四種あり。

- (イ) 自己に對する徳
- (ロ) 他人に對する徳

(ハ) 公衆に對する德

(ニ) 生物に對する德

(二) 團體的の德

團體に對する德に四種あり。

(イ) 家族に對する德

(ロ) 社會に對する德

(ハ) 國家に對する德

(ニ) 人類に對する德

是等の諸德は、何れも消極的方面に屬するものと、積極的方面に屬するものとあり又主德と從德との差別を認む。

第十課 前のつゞき

德は左の如く分類するを以て、最も便なりとす。

(一) 知能的德

(二) 感應的德

(三) 意志的德

(一) 知能的德に二種あり、一般的と特殊的との二種是なり、知能的德とは、吾人の知力が行爲に關する作用に由て、修得したる習慣をいふなり、例へば、(一) 眞理探究上に於ける信實、公平、専心、正確等、(二) 眞理傳達上に於ける誠實、熱心、酌量等、(三) 眞理應用上に於ける裁智、智惠等は、皆知能的德なり、故に一般の知能的德とは、是等諸種の知的作用を明確ならしむる吾人々類に共通の知能を練習して、修習したる良習慣をいふなり、之に反し、特殊の知能的德とは、吾人は其の従事する所の業務に由て、異なりたる知能的練習を要するものなれば、此の目的の爲めに、吾人が修養したる知能に屬する習慣

をいふなり。

(二) 感應的徳とは何ぞや、感應は其の本質不合理なるものにして、理性の先導を受くべき性質のものなれば、常に克く理性の指示する所に服従する感應の習慣を感應的の徳と稱す、此の種の徳に二種あり、消極・積極の二種是なり、消極に屬するものは、節制・自重等其の主なるものにして、眞善美に對する感應の修養は其の積極に屬するものなり。

(三) 意志的徳とは、意志が修得したる善良なる習慣をいふなり、此の種の徳にも二種あり、消極と積極との二者是なり、消極の都に屬するものは、自己の活動を制規する習慣をいふ、其の主なるものは、克己・自戒・自重・自制・謙讓等をいふなり、積極の部に屬するものは、人として爲すべきことを爲す習慣にして、其の主なるものは、勇氣・進取・公正・勤勉等の諸徳を

いふなり、

第十一課 修徳の方法

徳は、前來論述したる如き本質を有するものなれば、之を修養すること容易の事業にあらず、然れども人の本務を盡して生活せんと欲するものは、之が修養を一日も怠るべからず、又之が爲めに最良の方法を知りし、其の勞を浪費せざるを要す、今左に修徳の方法に關する要點を指示すべし。

(一) 過失を改むる消極的修養にても、亦善良なる習慣を養成せんとする積極的修養にても、修徳の志を懷くものは、初に確固たる決心を有せざるべからず、此の決心なくして漫に修徳の事業に著手すべからず、徒に始め、徒に廢する如きは、反て惡習慣を養成する恐ありて、品性修養に有害なり。

(二)次に修徳の事業に一旦著手したる以上は、必ず之を成
功する堪忍を有せざるべからず、徳は一朝一夕に養成せら
れ得るものにあらず、身體の習慣に於ても速成すること難
し、然らば、心意作用に善良なる習慣の速成を望むは不合理
の至にあらずや、又修徳上常に記憶すべきは、己に克ち欲を
制する消極の徳に於ても、亦進んで善を爲す積極の徳に於
ても、其の進歩するに従ひ、益、其の困難を減少するのみなら
ず、次第に興味を惹き起し、無上の快樂を生ずるに至るもの
なること是れなり、修徳も他の習慣の養成と同じく、進歩す
るに従ひて其勞少く其功多きに至るものなり、これ徳の報
酬なり。

(三)次に徳を修め高尚なる品性を形成せんと欲するもの
は、之に専心從事せざるべからず、世の所謂事業に於ても、心

専らならざれば、之を成功すること難し、吾人が知了する如
く、身體上の健全は、晝夜衛生上の法則を固守するにあらざ
れば、之を維持する能はず、病に罹りたる者健全に復せんに
は尙ほ一層注意する所なくんば、之を成功する事能はず、徳
は心意の健全なり、注意周到日夜怠る所なく勉むるにあら
ざれば、吾人は知らず識らず悪習慣に陥り易きものなり、況
して吾人は利己心強く、生來弱點多きものなれば、通常の人
は道德上の病者なり、道德上の過失を匡正し、以て善良なる
品性を養成せんには、注意周到寸時も怠るなく、勉むるにあ
らざれば、之を成功し能はざること明かなり、修徳は他の事
業の如く、之を爲さんが爲めに特別の時間を要するものに
あらず、吾人は、各自自己日常の業務を實行する上に於て之
を養成し得べし、修養は特別の行爲に於て養成せらるゝも

のにあらず、平常の業務を實行する精神と其の方法とに於て、之を養成し得るものなることを記憶せざるべからず。

第十二課 前のつゞき

(四) 徳は實行に由て養成せらるゝものにして、之を知ることとに由て養成せらるゝものにあらず、固より修徳には、健全なる知能の活動を要す、徳は知を離れて存するものにあらず、然れども、如何に倫理學上の理論に精通するも、毫も之が實行を試むることなき人は、徳を修むること能はず、如何に衛生上の學識に精通するも、毫も之を實行せず、常に其の法則に違背する人は、自己の健康を維持し能はざると同じく、如何に修徳の方法に精通するも、之を實行せざれば、有徳の人たる能はざるは論を待たずして明かなり。

(五) 次に、徳の養成は、常に理想に照して、其の習慣が正當なるか否やを考へざるべからず、然らざる時は、社會の進化に由て理想に反するものを徳と思惟し、品性に缺點を生ずることなきにあらず、又自己の理想に對照して、徳を養成せず、他人と自己とを比較して修徳するものは、其の幾分の成功に満足し、高慢の惡徳に陥る恐なきにあらず、吾人は常に自己の理想を以て、自己修徳の標準とし、之に接近することを努めざるべからず。

第十三課 修徳の工夫

以上修徳の方法に就て論明したり、左に修徳の工夫に就て論明せん。

修徳の方法は、普遍的なり、修徳の工夫は、特殊的ならざる

べからず、詳しく言へば、修徳の方法は、徳を修めんとする者の、一般に守らざるべからざる法則なり、之に依らずして自己の徳性を涵養すること難し、修徳の工夫は然らず、各人多少其の工夫を異にせざるべからず、何となれば、各人の生得する所同一ならずして、其の傾向を異にするものなればなり、されば、其の特質に注意して、人々其の性を全うせんが爲めに盡す所なかるべからず。

(一) 吾人は各自其の生得を異にするものなり、知力富めるものあり、意志強きものあり、情盛なるものありて、吾人は各自特質を有するものなり、又精密に考ふる時は、知情意の三能力にも人々によりて異同存す、例へば、思考力強き人あり、観察力強き人あり、想像力強き人あり、判断力強き人ありて、生來特有する所、同一にあらず、又意志の方面に於ても、決斷

力強き人あり、耐忍力強き人あり、進取の人あり、保守の人ありて各、其の傾向を異にす、又情の方面に於ても、獨立の情強き人あり、服従心に富める人あり、正義心強き人あり、慈悲深き人ありて、各、其の好む所を異にするものなり。

かく吾人は、各自其の天稟の傾向を異にするものなれば、其の發展の方法を異にし、又其の方向同一ならざるのみならず、其の願望も同じからずして、其の過失をも異にするものなり、故に或る人は常に専ら自己の制止に力を盡さざるべからず、之に反し、或る人は常に専ら其の力を自己の進動に注がざるべからず、或る人は意志の方面を奨励して、有力の人たらざるべからず、或る人は之に反して、知力の方面に注意し、事物に就て熟慮する習慣を養成せざるべからず。

かく人は、各自其の特質を異にし、修徳上注意すべき方面

同じからざれば、吾人は、各自其の生來の傾向を覺知し、一方に於ては、自己の缺點を補はんことを努むると同時に、自己生來の長所を認めて、之が發達を計り、以て自己の完全を求めざるべからず、これ即ち修徳の工夫なり。

第十四課 前のつゞき

(二) 吾人は各自生來の傾向を異にするのみならず、社會に於ける位置を異にし又其の職務をも異にするものなれば、各自自己の位置及び其の職務に相當する品性を養成せざるべからず、裁判官には、人としての品性以上に、裁判官としての必要なる品性なかるべからず、學者には、人としての品性以上に有すべき徳あり、教師にも、政治家にも、商業家にも、其の他の職務に従事する人に於ても、同様なり。是等の職務

と位置とに相當の人物たらんことを努むるも、これ亦修徳の工夫なり、他の語にていへば、吾人は各自善良なる社會の成員として、共通の徳を修養すると同時に、各自特得の品性を有するものなることを努めざるべからず、善人たると同時に特色ある善人たることを努めざるべからず、協動性を養成すると同時に、獨立性を養成せざるべからず、社會的なると同時に個人的ならざるべからず、是等兩者は相反するものにあらず、互に相補益するものなり、他を待ちて始めて全きを得るものなりといふも不可なしとす。

(三) 吾人は各自其の生得を異にし、社會に於ける位置同じからざるのみならず、其の生存する時代を異にするものなれば、各自其の時代に適應する徳を修めざるべからず、故に其の時勢を洞察し、之と相反するが如き品性を養はざること

とに注意すべきなり、これ修徳の工夫を要する所以なり、要するに吾人は、古の聖賢を尊敬すると同時に、漫に古人を模擬して當代に不適當なる人物と成らざるやう努めざるべからず。

第十五課 前のつゞき

(一) 吾人が修徳の工夫を爲すに當り、常に注意すべきは吾人が社會的方面の修養に努力する時は、其の品性實用的にして多方面に進化するも、淺薄に流るゝ恐あり、之に反して、個人的方面の修養に努力する時は、其の品性高雅にして、深奥なるも、仙人的僻性を生ずること是なり、故に吾人は、各自多方面、實用的なると同時に深奥高雅なる品性を養成することに注意せざるべからず、以上二者の一方面にのみ進化

する修徳の工夫は、完全なる修徳の工夫と稱すべからざるなり。

(二) 次に吾人は、各自自己の修養上常に積極的方面の進化を努むると同時に、消極的方面の發達を怠るべからず、詳しく言へば、吾人は善行を愛し、善行を樂しむと同時に、罪惡を恐れ、惡事を惡む心情の發達を努めざるべからず、善を愛するも惡を惡まざる品性は、完全なる品性といふべからず、修徳の目的は、善惡を無差別に同一視する品性の養成にあらず、反て其の差別を益明晰ならしむるにあり、積極的方面を有せざれば、品性が感化力を缺くが如く、消極的方面を有せざる品性は、其の威權を保つこと能はず。

要するに、以上論述したる如く、吾人は各自其の生得の傾向を異にするものなれば、其の修徳の工夫を異にせざるべ

からず、然れども、常に其の品性が社會的なると同時に個人的にして、又積極的なると同時に消極的方面を失はざることに注意し、以て其の修徳の工夫を講せざるべからざるなり。

師範學校用修身教科書卷の四終

明治三十四年五月廿二日印刷

師範學校用修身教科書卷四

明治三十四年五月廿五日發行

定價 金九拾錢

本書ハ著作及ヒ發行ノ章トス

著作權

登錄濟

萬一檢印ナキモノヲ發賣スル者アルトキハ其旨ヲ通知セラル

著作者

東京市牛込區南町三十四番地
中島力造

著作者

東京市牛込區新小川町三丁目二番地
篠田利英

印刷者

東京市日本橋區本町四丁目十六番地
小林義則

發兌

東京市日本橋區本町四丁目十六番地
文學社

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所

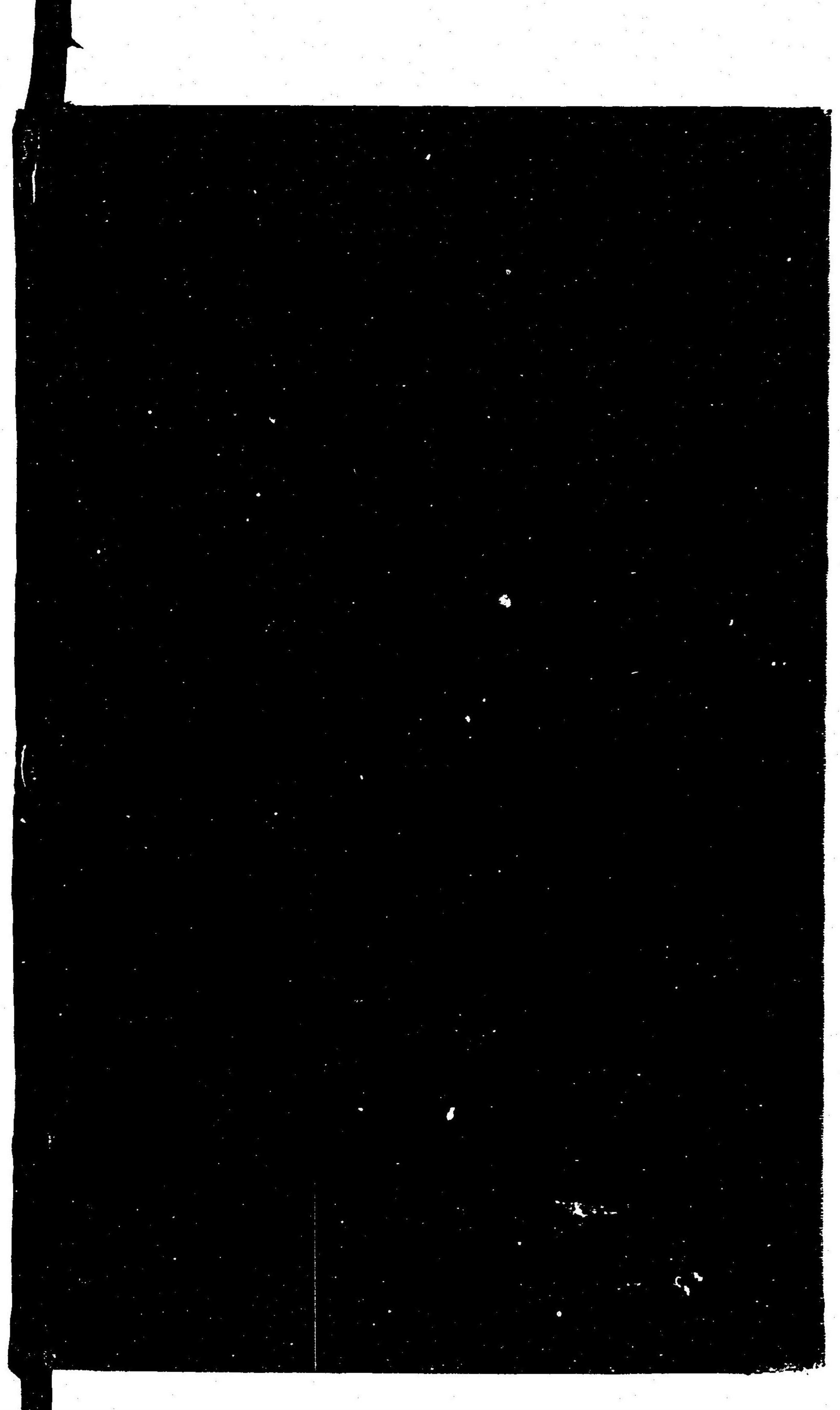
文學社工場

大賣捌所

各府縣特約書林

90

171



90
171

